

A close-up photograph of a surgeon in a blue surgical cap and mask, wearing blue gloves, performing a surgical procedure. The background is a light blue gradient with diagonal lines.

# 新潟市民病院外科専門研修

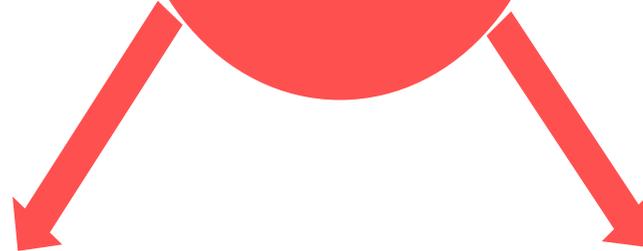
2023/05

# 新潟市民病院 外科専門研修プログラム

初期研修修了者



基幹施設  
新潟  
市民病院



連携施設

- ・新潟大学
- ・鶴岡市立荘内病院
- ・県立新発田病院
- ・県立がんセンター新潟病院
- ・新潟南病院
- ・新潟臨港病院
- ・長岡赤十字病院
- ・立川総合病院
- ・県立中央病院
- ・済生会新潟病院

各領域発展コース

連携施設

3年間

Ph.D.コース

連携施設

+ 新潟大学大学院  
(社会人枠)

大学院修了で研修修了

# 新潟市民病院外科専門研修プログラム



募集人数 3名/年      研修期間3年（大学院は大学院修了時）

## 各領域発展コース

圧倒的症例数で専門医を最短で取得

新潟市民病院 2年

+

連携施設 1年

## Ph.D.コース

学位論文の早期作成

新潟市民病院 1年

+

連携施設1年

+

新潟大学大学院

### 連携施設

- ・新潟大学
- ・鶴岡市立荘内病院
- ・県立新発田病院
- ・県立がんセンター新潟病院
- ・新潟南病院
- ・新潟臨港病院
- ・長岡赤十字病院
- ・立川総合病院
- ・県立中央病院
- ・済生会新潟病院

# プログラム概要



新潟市民病院

連携施設

新潟市民病院

1年目

2年目

3年目

全領域研修

サブスペシャリティ研修

消化・心呼・小児・乳腺  
6M 4M 1M 1M

消化 心・呼 小児 乳腺

(修学資金等で施設制限の場合には適宜対応)

# 新潟市民病院(NCD登録数/年)-1,3年次



1991



# 連携施設(NCD登録数/年)-2年次

決めるのは専攻医！



新大(1536)



荘内(581)



新発田(1051)



がんC新潟(1226)



長岡日赤(1292)



立川(1388)



済生会新潟(1078)



県立中央(1145)



新潟南(225)



臨港(432)

# プログラムの特徴



- 小外科～高難度手術まで網羅
- 募集人数の制限(質の担保) **5名→3名**
- “Academic surgeon”を育成 学会発表・英語論文作成

手術数 12,000例/年(按分数 2,600例/年)

High volume, High Qualityな研修

手術経験数は必要症例数の約2.5倍

Top surgeonの育成を目指す

# 恵まれた研修環境



- 電子カルテ端末は医師一人に一台
- 電子カルテ端末から手術動画が閲覧可能
- 院内図書室あり(24時間オープン・専属職員2名)
- 医学雑誌(英文・和文)の契約多数

# 経験症例数

2.5~3倍の経験症例数

	必要症例数		専攻医A先生		専攻医B先生
消化管及び腹部内臓	50例		797		671
乳腺	10例		14		80
呼吸器	10例		24		14
心臓・大血管	10例		20		28
末梢血管	10例		22		18
頭頸部・体表・内分泌外科	10例		21		32
小児外科	10例		11		13
外傷	10点		6例 18点		5例 15点
合計			915		861
術者	120例		370		493
助手			545		368
合計	350例		915		861
通常手術			475		522
内視鏡手術	10例		440		339
合計	350例		915		861
業績(点)	20点以上		78点		133点

# 専門研修後の進路



国立がんセンター東 (2)

静岡がんセンター (3)

愛知がんセンター (1)

埼玉がんセンター (1)

東京大学 (1)

名古屋大学 (1)

順天堂大学 (1)

昭和大学 (1)

新潟大学 (3)

旧外科専門医を含む

# 採用試験



**日時は未定**

募集要項はHPに掲載

**試験内容**

- ・筆記試験(外科領域の選択問題)
- ・面接

(1回以上の病院見学 or Web面談が必須です)

**入局・出身地・初期研修病院・男女等：不問**

**要：熱い志**

募集人数 3名/1学年

# 問い合わせ

新潟市民病院 専門研修支援室

[senmon@hosp.niigata.niigata.jp](mailto:senmon@hosp.niigata.niigata.jp)

新潟市民病院 外科専門研修



# 新潟市民病院

## 外科専門研修プログラム

作成：新潟市民病院

外科専門研修プログラム管理委員会

V e r 2.0 (2023年5月)

## 【 I. 専門研修プログラムの理念・使命・特徴 】

### ● 外科領域専門制度の理念

新潟市民病院 外科専門研修プログラム（以下 本プログラム）は、「外科領域専門研修プログラム整備基準」

([https://jp.jssoc.or.jp/uploads/files/specialist/curriculum-new\\_01.pdf](https://jp.jssoc.or.jp/uploads/files/specialist/curriculum-new_01.pdf)) に準拠し、基幹施設および連携施設において、以下に示す外科専門医の育成を行うことを理念とします。

〈本プログラムが目指す外科専門医とは〉

本プログラムでは、医の倫理を体得し一定の修練を経て、医師としての基本的な診療能力を有する外科医の養成を目指します。外科医の基本的な診療能力とは、診断、手術適応判断、手術および術前後の管理・処置、合併症対策などの一般外科医療に関する標準的な知識とスキル、さらにプロフェッショナルとしての態度など全てを含みます。外科専門医資格は規定の手術手技を経験し、一定の資格認定試験を経て認定されます。また、この資格はサブスペシャリティ領域：消化器外科、心臓血管外科、呼吸器外科、小児外科、乳腺外科、内分泌外科）や、それに準じた関連領域の専門医取得に必要な基盤となる共通の資格です。外科専門医の維持と更新には、最新の知識・テクニック・スキルを継続して学習し、安全かつ信頼される医療を実施していることが必須条件となります。

### ● 外科専門医の使命

外科専門医の使命は以下の2つです。

- 1) 標準的かつ包括的な外科医療を提供することにより、国民の健康を保持し福祉に貢献すること。
- 2) 外科領域診療に関わる最新の知識・テクニック・スキルを習得し、実践できる能力を養いつつ、この領域の学問的発展に貢献すること。

### ● 本プログラムの特徴

本プログラムでは、High volume・High quality な研修により、外科専門医に求められる全ての要素を身に着けた Top Surgeon の育成を目指しています。

本プログラムは、当院を基幹施設とし、新潟大学や県内外の地域の中核病院を連携施設として研修施設群を構成しました。連携施設群の病院も、サブスペシャリティ領域の診療科を複数科有し、豊富な症例数と指導医を擁しています。このため専攻医の希望や習熟度によって、消化器外科、心臓血管外科、呼吸器外科、小児外科、乳腺外科領域を、研修施設によらず満遍なく履修することが可能です。

また専攻医は診療能力の向上のみならず、研究や学会等に積極的に参加し、“Academic surgeon”としての姿勢も求められます。全ての研修施設群においてこうした指導も積極的に行える体制を整えています。また早期に学位取得を目指す専攻医も考慮し、外科専門研修と新潟大学大学院への進学を並行して行える大学院（Ph. D.）コースも設定しました。

### ● 本プログラムによる研修後の成果

本プログラムの研修後、以下の要素を備えた外科専門医となることができます。

- 1) 外科領域のあらゆる分野の知識とスキルを習得している。
- 2) 外科領域の臨床的判断と問題解決を主体的に行うことができる。
- 3) 診断から手術を含めた治療戦略の策定、術後管理、合併症対策まで、全ての外科診療に関するマネジメントができる。
- 4) 医の倫理に配慮し、外科診療を行う上での適切な態度と習慣を身に付けている。
- 5) 外科学の進歩に合わせた生涯学習を行うための方略を修得している。
- 6) 外科学の進歩に寄与する研究を実践するための基盤的知識・方略を体得している。

## 【Ⅱ. 専門知識・技能の習得計画】

### 1. 到達すべき目標

#### 1) 専門知識

専攻医は、外科診療に必要な基礎的知識・病態を理解しこれを臨床応用できることが求められます。学ぶべき項目は14項目あり、詳細については「外科領域専門研修プログラム整備基準」の2ページを参照して下さい。

#### 2) 専門技能

専攻医は、外科診療に必要な検査・処置・麻酔手技に習熟し、それらの臨床応用ができることが求められます。具体的な到達目標は、「外科領域専門研修プログラム整備基準」の3ページを参照して下さい。

#### 3) 学問的姿勢

専攻医は、外科学の進歩に合わせた生涯学習の基本を習得し、実践できることが求められます。このために、専攻医は、カンファレンスやその他の学術集会に出席し積極的に討論に参加することが求められます。また、学術集会や学術出版物に、症例報告や臨床研究の結果を発表すると同時に、これらに必要な資料の収集や文献検索を独自で行う能力を身に付けることも求められます。

なお、「学術集会や学術出版物に、筆頭者として症例報告や臨床研究の結果を発表する経験」は、一定単位以上の業績が必要です（20単位）。詳細については「外科領域専門研修プログラム整備基準」の4ページを参照して下さい。

#### 4) 倫理性・社会性など

専攻医は、外科診療を行う上で、医の倫理や医療安全に基づいたプロフェッショナルとしての適切な態度と習慣を身に付けることが求められます。これは、外科専門研修期間にとどまるものでなく、医師として生涯を通じて必要なことですが、詳細については「外科領域専門研修プログラム整備基準」の4ページを参照して下さい。

## 2. 経験すべき目標

### 1) 経験すべき外科疾患

専攻医は外科診療に必要な一連の疾患を経験し理解することが求められます。

経験すべき具体的な疾患については「外科領域専門研修プログラム整備基準」の5～6ページを参照して下さい。

### 2) 経験すべき外科手術・処置

・専攻医は、NCD(National Clinical Database (<https://www.ncd.or.jp/>))に登録された一定レベルの手術を適切に実施できる能力を修得し、その臨床応用ができることが求められます。

・経験すべき外科手術・処置数には、以下の規定があります。

(1) NCDに登録される350例以上の手術手技を経験することが必須です。

(2) (1)のうち術者として120例以上の経験をすることが必須です。

(3) 各領域の手術手技または経験の最低症例数は以下の通りです。

① 消化管および腹部内臓 (50例)

② 乳腺 (10例)

③ 呼吸器 (10例)

④ 心臓・大血管 (10例)

⑤ 末梢血管 (頭蓋内血管を除く) (10例)

⑥ 頭頸部・体表・内分泌外科 (皮膚、軟部組織、顔面、唾液腺、甲状腺、上皮小体、性腺、副腎など) (10例)

⑦ 小児外科 (10例)

⑧ 外傷の修練 (10点)

⑨ 上記①～⑦の各分野における内視鏡手術 (腹腔鏡・胸腔鏡を含む)

・なお外傷の修練については、手術経験のみでなく、外傷研修コースなどの受講などでも認められます。経験すべき外科手術・処置数は、外科専門研修の中核を成すも

のであり、詳しくは、「外科領域専門研修プログラム整備基準」の8ページを参照して下さい。

- ・初期臨床研修期間中に経験した症例の扱いについて  
専攻医が初期臨床研修期間に経験した症例（NCDに登録されていることが必須）は、上記の手術症例数に加算することができます。

### 3) その他

専攻医は、研修期間中に地域医療における外科診療の役割を学び、実際の経験を通してこれを実行できることが求められます。具体的には、病診連携や病病連携、地域包括ケアシステムの理解、在宅医療の実際などを経験することが求められます。詳しくは「外科領域専門研修プログラム整備基準」の8ページを参照して下さい。

## 【Ⅲ. 専門知識・技能の習得の方法（専門研修の方法）】

Ⅱに掲げた目標に到達するための研修方法は、1. 臨床現場での学習、2. 臨床現場を離れた学習、3. 自己学習の3つの柱で構成されます。詳しくは「外科領域専門研修プログラム整備基準」の10ページを参照して下さい。

### 1. 臨床現場での学習

専攻医は専門研修施設群内の施設で、専門研修指導医のもとで研修を行います。全ての専門研修指導医は、専攻医が偏りなく前述した到達（経験）目標を達成できるよう配慮します。

### 2. 臨床現場を離れた学習（例）

#### 1) 多職種スタッフによる治療および管理方針の症例検討会

専攻医は研修施設において、参加し積極的に意見を述べ、同僚の意見を聴くことにより、具体的な治療と管理の論理を学ぶことが求められます。

#### 2) 放射線診断・病理合同カンファレンスへの参加

専攻医は、手術症例を中心に放射線科とともに術前画像診断を検討し、切除検体の病理診断を行う合同カンファレンスへの参加が求められます。

#### 3) CancerBoardへの参加

専攻医は、複数の臓器に広がる進行・再発例や、重症の内科合併症を有する症例、非常に稀で標準治療が無い症例などの治療方針について、内科、その他の関連診療科、病理部、放射線科、緩和、看護スタッフなどによるCancerBoardへ参加することが求められます。

#### 4) 基幹施設と連携施設による症例発表会への参加

専攻医は、各施設の専攻医や専門医による学会（日本外科学会などの全国学会）に参加し、発表内容、スライド資料の良否、発表態度について指導的立場の医師や同僚・後輩から質問を受け、討論を行うことが求められます。

### 3. 自己学習の実際（例）

1) 専攻医は、各施設において抄読会や勉強会に参加し、また必要に応じて、最新のガイドラインを参照するとともにインターネットによる情報検索を行うことが求められます。また、可能であれば大動物を用いたトレーニングへの参加や、教育 DVD を用いた手術手技の学習に参加することが求められます。

2) 専攻医は、日本外科学会の学術集会（特に教育プログラム）、e-learning、その他各種の研修セミナーや、各施設内で実施されるこれらの講習会において、標準的医療及び今後期待される先進的医療、医療倫理、医療安全、院内感染対策について学ぶことが求められます。

## 【IV. リサーチマインドの養成および学術活動に関する研修計画】

### 1. 習得すべき学問的姿勢

本プログラムでは、外科学の進歩に合わせた生涯学習の基本を習得し、実践できることを目指します。専攻医は学問的姿勢について、医学・医療の進歩に遅れることなく、常に研鑽、自己学習することが求められます。患者の日常的診療から浮かび上がるクリニカルクエスチョンを日々の学習により解決し、今日のエビデンスでは解決し得ない問題は、臨床研究に自ら参加、もしくは企画する事で解決しようとする姿勢を身につけることが必要です。

### 2. 実施すべき学術活動

専攻医は、カンファレンスやその他の学術集会に出席し、積極的に討論に参加することが求められます。さらに、得られた成果は論文として発表し、公に広めるとともに批評を受ける姿勢を身につけることが必要です。また、これらに必要な資料の収集や文献検索を独自で行う能力を身に付けることが求められます。各研修施設の指導医は、学術集会への参加について配慮するとともに、筆頭者としての発表または論文作成の際には、十分な指導を行います。

#### 専攻医に求められる具体的な学術活動

##### 1) 学術発表

指定の学術集会または学術刊行物に、筆頭者として研究発表または論文発表することが求められます。本プログラムでは、「日本外科学会」、「日本臨床外科学会」などでの研究発表を想定しています。

##### 2) 学術参加

日本外科学会定期学術集会に1回以上参加することが求められます。

##### 3) 研究参加

臨床研究または学術研究に参加し、“Academic surgeon”を目指すのに必要な、基礎的知識、スキルおよび志を習得することが求められます。

補足：「学術集会や学術出版物に、筆頭者として症例報告や臨床研究の結果を発表する経験」は、一定単位以上の業績が必要です（20単位）。詳細については「外科領域専門研修プログラム整備基準」の9ページを参照して下さい。

## 【V. コアコンピテンシー (Core competency) の研修計画】

医師に求められるコアコンピテンシーには態度、倫理性、社会性などが含まれています。これらを身に付けることは、3年間の研修にとどまるものではありませんが、本プログラムで目指す内容は以下の通りです。

### 1. 医師としての責務を自律的に果たし信頼されること

医療の専門家である医師と、患者を含む社会との契約を十分に理解し、患者、家族から信頼される知識・技能及び態度を身に付けることを目指します。

### 2. 患者中心の医療・医の倫理の理解、医療安全への配慮

患者の社会的・遺伝学的背景もふまえ、患者の状態に応じた的確な医療を提供できることを目指します。また医療安全の重要性を理解し事故防止・事故後の対応をマニュアルに沿って実践できることを目指します。

### 3. 臨床の現場から学ぶ態度

臨床の現場から学ぶことの重要性を認識し、その方法を身に付けます。

### 4. チーム医療の理解

チーム医療の必要性を理解し、チームリーダーとして活動し、的確なコンサルテーションや、他のメディカルスタッフと協調して診療を実践できることを目指します。

### 5. 後輩医師への教育・指導

自らの診療技術・態度が後輩の模範となるばかりでなく、後輩医師に対して形式的指導を実践できることを目指します。このため指導医の下、学生、初期研修医および後輩専攻医と共に患者を受け持ち、チーム医療の一員として後輩医師の教育・指導が出来ることを目指します。

### 6. 保健医療や主たる医療法規の理解・遵守

健康保険制度を理解し、保健医療をメディカルスタッフと協調し実践できることを目指します。また医師法・医療法、健康保険法、国民健康保険法、老人保健法を理解し、診断書、証明書を的確に記載できることを目指します。

## 【VI. 地域医療に関する研修計画】

### 1. 施設群における研修

本プログラムでは新潟市民病院を基幹施設とし、対象医療圏内の各地域の連携施設とともに病院施設群を構成しています。専攻医はこれらの施設群をローテートすることにより、地域の連携病院で多彩な症例を多数経験し、医師としての基本的な力を獲得することが求められます。詳細については、「外科領域専門研修プログラム整備基準」の8ページを参照して下さい。

### 2. 実際の地域医療の経験

本プログラム研修中では基幹施設・連携施設において、外科の立場から病診連携・病病連携、地域包括ケア、在宅医療などの研修も可能です。具体的には、地域の医療資源や救急体制について把握し、地域の特性に応じた病診連携・病病連携のあり方について理解して実践します。また終末期の患者の緩和ケアなど、ADLの低下した患者に対して、在宅医療や緩和ケア専門施設などを活用した医療を立案できます。

## 【Ⅶ. 専攻医の研修ローテーション】

### 1. 新潟市民病院 外科専門研修施設群

本プログラムでは、新潟大学を含むその他の連携施設（計10施設）により専門研修施設群を構成します。この研修施設群で89名の専門研修指導医が専攻医を指導します。

#### 【外科専門研修 基幹施設】

名称	都道府県	1:消化器外科, 2:心臓血管外科, 3:呼吸器外科, 4:小児外科, 5:乳腺内分泌外科, 6:その他（救急含）	1. プログラム統括 責任者名 2. 副プログラム統括 責任者名
新潟市民病院	新潟県	1. 2. 3. 4. 5. 6.	1. 桑原史郎 2. 横山直行

#### 【外科専門研修 連携施設群】

No.	名称	都道府県		連携施設担当者名
1	新潟大学	新潟県	1. 2. 3. 4. 5. 6.	若井俊文
2	鶴岡市立荘内病院	山形県	1. 3. 4. 5. 6	鈴木 聡
3	県立新発田病院	新潟県	1. 2. 3. 5. 6.	塚原明弘
4	県立がんセンター新潟病院	新潟県	1. 3. 5	中川 悟
5	長岡赤十字病院	新潟県	1. 2. 3. 4. 5. 6.	谷 達夫
6	立川総合病院	新潟県	1. 2. 5. 6	蛭川浩史
7	県立中央病院	新潟県	1. 2. 3. 4. 5. 6.	鈴木 晋
8	新潟南病院	新潟県	1. 5	佐藤洋樹
9	新潟臨港病院	新潟県	1	渡辺隆興
10	済生会新潟病院	新潟県	1. 2. 3. 5. 6.	武者信行

※ 当院は、新潟大学、富山大学、山梨大学、久留米大学、琉球大学の連携施設としても機能します。これらの施設から専攻医を受け入れる場合は、予め提出した割合でその専攻医の経験症例数を確保します。

## 2. 専攻医の受け入れ数について

- 1) 本専門研修施設群の1年間のNCD登録数は12,000例、専門研修指導医は115名です。この数値から本プログラムで募集可能な専攻医数の上限は年間5名です。
- 2) 当院における他専門領域専攻医の採用数も考慮し、2023年度の募集専攻医数は3名を予定しています。
- 3) 採用にあたっては、外科専門研修プログラム管理委員会で選考試験（筆記および面接）を行います。
- 4) 2024年度以降の募集人員は、応募状況や研修施設群内における研修状況を考慮して決定する予定です。

## 3. 実際のローテーションについて

- 1) 研修期間は原則3年（基幹施設2年、連携施設1年）を基本とします。  
（大学院進学を希望する場合は除きます。また修学資金等の関係で研修期間等が限定される場合等は個別に検討します。）
- 2) 基幹施設と連携施設の研修期間、施設の選択やローテートの時期については、専攻医が希望するサブスペシャリティ領域を考慮し、外科専門研修プログラム管理委員会で調整する場合があります。しかし全ての専攻医で、研修内容と経験症例数に偏りや不公平がないよう十分配慮します。
- 3) 本プログラムにおけるコースは以下の2つです。

### 〈各領域発展コース〉

このコースでは、3年間の履修期間を通して、消化器外科・心臓血管外科・呼吸器外科・乳腺外科・小児外科の全てを基幹施設と連携施設でじっくりと学びます。3年目は、将来希望するサブスペシャリティ領域も視野に入れて研修を行う予定です。

### 〈大学院（Ph. D.）コース〉

新潟大学社会人枠に所属し、臨床に従事しながら臨床研究を進めるコースです。大学院の期間は専門研修期間として扱われます。このコースでは外科専門研修をある程度終了した後、大学院へ進学し、臨床研修と並行しながら学術研究・基礎研究を開始し学位取得を目指します。大学院進学は、原則的に研修3年目からとなり、大学院進

学後の外科専門研修は連携施設である新潟大学で行い、大学院修了をもって研修終了となります。

#### 4. 年次ごとの専門研修計画

専門研修期間は専攻医の年次ごとに、整備基準に基づいた、外科専門医に求められる知識・技術の習得目標を設定し、その年度の終わりに達成度を評価して行きます。以下に年次ごとの研修内容・習得目標の目安を示します。

##### 1) 専門研修1年目

基本的診療能力および外科基本的知識と技能の習得を目標とします。

専攻医は定期的開催されるカンファレンスや症例検討会、抄読会、院内主催のセミナーの参加、e-learning や書籍・論文などの通読、日本外科学会が用意しているビデオライブラリーなどを通して、自らも専門知識・技能の習得を図ります。

##### 2) 専門研修2年目

基本的診療能力の向上に加えて、外科基本的知識・技能を実際の診断・治療へ応用する力量を養うことを目標とします。専攻医はさらに学会・研究会への参加などを通して専門知識・技能の習得を図ります。

##### 3) 専門研修3年目

チーム医療において責任を持って診療に従事し、後進の指導にも参画し、リーダーシップを発揮して、外科の実践的知識・技能の習得により様々な外科疾患へ対応する力量を養うことを目標とします。カリキュラムを習得したと認められる専攻医には、積極的にサブスペシャリティ領域専門医取得に向けた技能研修へ進みます。

#### 5. 本プログラムにおける研修内容と予想される経験症例数

ここでは、各領域発展コースを選択し、1年目：基幹施設、2年目：連携施設、3年目：連携施設または基幹施設で研修した場合を想定しました。

##### 1) 専門研修1年目

基幹施設（新潟市民病院）に所属し研修を開始します。

消化器外科6か月、心臓血管呼吸器外科4か月、小児外科1か月、乳腺外科1か月にローテーションします。基本的診療能力および外科基本的知識と技能の習得を目標とします。専攻医は外科チームの一員として手術術者、助手の経験を積み、周術期管理を学びます。また定期的開催されるカンファレンスや症例検討会、抄読会、院内

主催のセミナーの参加、e-learning や書籍・論文などの通読、院内ビデオライブラリーなどを通して、自らも専門知識・技能の習得を図ります。

目標経験症例 260 例以上／1 年間 （目標術者数 80 例以上/1 年間） 学術活動 20 単位以上/1 年間

## 2) 専門研修 2 年目

連携施設（1～2 施設）に所属し研修を行います。

基本的診療能力の向上に加えて、外科基本的知識・技能を実際の診断・治療へ応用する力量を養うことを目標とします。専攻医はさらに学会・研究会への参加などを通して専門知識・技能の習得を図ります。外科専門医取得に必要な症例数に到達した場合にはサブスペシャリティ領域の研修を見据えた研修も可能です。

目標経験症例 600 例以上／2 年間 （目標術者数 200 例以上/2 年間） 学術活動 50 単位以上/2 年間

## 3) 専門研修 3 年目

基幹施設に所属し研修の総仕上げを行います。2 年間で外科専門医取得の必要症例数を満たしていることが多いため、主として希望するサブスペシャリティ領域の研修となります。チーム医療において責任を持って診療に従事し、後進の指導にも参画し、リーダーシップを発揮して、外科の実践的知識・技能の習得により様々な外科疾患へ対応する力量を養うことを目標とします。外科専門医達成項目が十分履修されている専攻医においては、サブスペシャリティ領域の研修も開始します。

目標経験症例 850 例以上／3 年間 （目標術者数 400 例以上/3 年間） 学術活動 70 単位以上/3 年間

## 4) 補足

ここに提示した目標数はあくまでも目安であり、症例数・術者数は専攻医の数および研修病院の状況によって変わります。しかし本プログラムでは、どのような場合でも、規定の経験数・術者数は十分にクリアすることが可能です。

また、大学院（Ph. D.）コースを選択する専攻医は、3 年目より新潟大学大学院社会人枠に所属し、研究をまとめながら、学位取得と外科専門医取得まで、新潟大学で研修を継続していくことになります。

## 【Ⅷ. 専攻医の評価時期と方法】

1) 研修中の専攻医と指導医の相互評価は、臨床面の研修とともに専門研修プログラムの根幹となるものです。専攻医及び指導医は、各研修年度にコアコンピテンシーと外科専門医に求められる知識・技能の習得目標を設定し、年度の終わりに達成度を相互評価します。達成度の評価とフィードバックを繰り返すことで、専攻医が着実に実力をつけられることを目指します。なお専攻医の評価は、多職種（看護師など）のメディカルスタッフの意見も取り入れて行います。

2) 外科専門研修プログラム統括責任者と専門研修プログラム管理委員会は、専門医認定申請年(3年目)の3月末に、各専攻医の年度毎の評価と3年間の実地経験目録を基に、以下の2項目を評価します。

- ① 知識・技能・態度が、外科専門医試験を受けるにふさわしいかどうか。
- ② 症例経験数・学術活動等が、日本専門医機構の外科領域専門研修プログラム整備基準が要求する内容を満たしているかどうか。

この①、②を満たしていると判断された専攻医に対して、専門研修プログラム統括責任者が研修修了の判定をします。

## 【Ⅸ. 専門研修管理委員会の運営計画】

1) 基幹施設である新潟市民病院には、専門研修プログラム管理委員会と専門研修プログラム統括責任者を置きます。また連携施設群には、専門研修プログラム管理委員会と連携する専門の委員会を設置します。

2) 専門研修プログラム管理委員会の構成メンバー

- ① 専門研修プログラム 統括責任者 1名
- ② 専門研修プログラム 副統括責任者 1名
- ③ サブスペシャリティ領域の研修指導責任者 各1名  
(消化器外科、心臓血管呼吸器外科、小児外科、乳腺外科、内分泌外科)
- ④ 外科専門研修プログラム管理委員会 専門事務職員 1名
- ⑤ 専門医取得直後の若手医師代表者 1名
- ⑥ メディカルスタッフ（看護部長、放射線科技師長、薬剤部長） 各1名
- ⑦ 各連携施設の担当者 各1名

- 3) 専門研修プログラム管理委員会は、専門研修プログラム統括責任者を中心として、専攻医および本プログラム全般の管理と、プログラムの継続的改良を行います。なおプログラムの改善を目的とする会議には、外科専門医取得直後の若手医師代表が加わります。また専攻医の評価を行う場合は、メディカルスタッフが参加します。
- 4) 専門研修プログラム管理委員会は、原則として6か月毎に開催します。  
(また必要に応じてその都度開催することがあります。)

## **【X. 専門研修指導医の研修計画】**

専門研修指導医は、日本外科学会学術集会やサブスペシャリティ領域学会の学術集会、それに準ずる外科関連領域の学会の学術集会、基幹施設などで開催する指導者講習会などの機会にフィードバック法を学習し、より良い専門研修プログラムの作成を目指します。

## **【XI. 専攻医の就業環境の整備機能】**

- 1) 基幹施設および連携施設の外科責任者は、専攻医の労働環境改善に努めます。
- 2) 専門研修プログラム統括責任者または専門研修指導医は、専攻医のメンタルヘル스에配慮します。
- 3) 専攻医の勤務時間、当直、給与、休日は労働基準法に準じて各専門研修基幹施設、各専門研修連携施設の施設規定に従います。

## **【XII. 専門研修プログラムの評価と改善方法】**

- 1) 専攻医は「専攻医による評価」に指導医および専門研修プログラムの評価を記載して、年度ごとに専門研修プログラム統括責任者に提出します。この評価内容で専攻医が不利益を被ることはありません。
- 2) 専門研修プログラム統括責任者は、報告内容を匿名化し、専門研修プログラム管理委員会で審議を行い、プログラムの改善を行います。
- 3) 些細な問題は本プログラム内で処理しますが、重大な問題が生じた場合には、日本外科学会外科研修委員会に評価を委託します。

- 4) 専門研修プログラム管理委員会では、「専攻医による評価」に基づき、必要に応じて指導医の教育能力を向上させる支援を行います。
- 5) なお、専攻医は専門研修プログラム統括責任者または専門研修プログラム管理委員会に報告し難い事例（パワーハラスメントなど）について、日本外科学会外科研修委員会へ直接申し出ることができます。
- 6) 基幹施設である新潟市民病院およびその連携施設群では、必要に応じて行われる、プログラム運営に関する外部からの監査・調査（サイトビジット）に、真摯に対応します。

### 【XIII. 外科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件】

- 1) 専門研修における休止期間は最長 180 日とします。妊娠・出産・育児、傷病など、その他正当な理由による休止期間が 180 日を超え、期間内での習得が不十分な場合は「未修了」扱いとします。
- 2) 症例経験基準、手術経験基準を満たしていない場合も、「未修了」として扱い、原則として引き続き本プログラム内で研修を継続します。
- 3) 「未修了」扱いの場合、その後の研修期間や施設選択については、専門研修プログラム管理委員会が専攻医と相談の上決定します。
- 4) その他、研修の休止、中断、プログラム移動、未修了についての詳細は、「外科領域専門研修プログラム整備基準」14 ページを参照してください。

### 【XIV. 専門研修実績記録システム、マニュアル等の整備について】

- 1) 本プログラム運用のためのマニュアル  
専攻医・指導医は、日本外科学会 HP の研修実績管理システムを用いて、研修・指導を行います。
- 2) 研修実績および評価の記録
  - ① 日本外科学会 HP の研修実績管理システム（専攻医向け）を用いて研修を行います。
  - ② 研修実績を記録し、手術症例は NCD に登録します。

3) 専攻医の研修履歴の保存

「専攻医の研修施設と研修期間、担当した指導医、研修実績、専攻医への研修評価」および「専攻医からの専門研修施設および専門研修プログラムに対する評価」などの記録は、基幹施設である新潟市民病院専門研修支援室で最低5年間保管します。

4) 指導者研修計画の記録

専門研修指導医は、日本専門医機構、日本外科学会、サブスペシャリティ領域学会またはそれに準ずる外科関連領域の学会が主催する指導者のための講習会に、積極的に参加し参加記録を保存します。

## 【XV. 専攻医の採用方法】

1) 次年度プログラムに関する予定は以下の通りです。

- ・病院ホームページへの募集要項掲載：6月1日
- ・専攻医募集期間：7月1日～8月31日（消印有効）
- ・専攻医採用試験：9月

2) 申請に必要な書類

- ① 新潟市民病院 外科専門研修プログラム応募申請書
- ② 所属長の推薦状
- ③ 医師免許のコピー

3) 「新潟市民病院 外科専門研修プログラム応募申請書」の入手方法  
新潟市民病院ホームページよりダウンロード（予定）

4) 申請書の提出先

〒950-1197 新潟市中央区鍾木 463-7 新潟市民病院 専門研修支援室  
新潟市民病院 外科専門研修プログラム統括責任者 宛

5) 採用試験の内容

筆記・面接

1回以上の病院見学 or Web面談が必須です

6) 採用結果の通知について

合格者については、各人毎に連絡します。

- 7) 追加募集について  
専攻医の応募状況によっては、随時追加募集を行う場合もあります。
- 8) 詳細についての問い合わせ先
- 全ての情報は新潟市民病院ホームページに適宜掲載します。
  - 不明な点があれば、以下に連絡をお願いします。  
TEL 025-281-5151：専門研修支援室（内線 4628）  
FAX 025-281-5187  
E-mail：[senmon@hosp.niigata.niigata.jp](mailto:senmon@hosp.niigata.niigata.jp)

## 【XVI. 研修開始と修了手続き】

### 1. 研修開始届け

研修を開始した専攻医は、外科学会ホームページの新専門医新規申請 INDEX を参照し研修開始登録をします。

[https://jp.jssoc.or.jp/modules/specialist/index.php?content\\_id=2](https://jp.jssoc.or.jp/modules/specialist/index.php?content_id=2)

### 2. 研修の修了について

専門研修プログラム修了時に、専門研修プログラム管理委員会で専攻医の総括的評価を行います。

〈修了要件〉

外科専門研修プログラム統括責任者と専門研修プログラム管理委員会は、専門医認定申請年(3年目)の3月末に、各専攻医の年度毎の評価と3年間の実地経験目録を基に、以下の2項目を評価します。

- ① 知識・技能・態度が、外科専門医試験を受けるにふさわしいかどうか。
- ② 症例経験数・学術活動等が、日本専門医機構の外科領域専門研修プログラム整備基準が要求する内容を満たしているかどうか。

この①、②を満たしていると判断された専攻医に対して、専門研修プログラム統括責任者が研修修了の判定をします。